生活時間調査から見る道東地区小学生の生活実態

小　野　恭　子
（弘前大学教育学部）

Realities of eastern Hokkaido district elementary school students to understand from the time use survey

Kyoko ONO

北海道道東地区（釧路管内）にある小学校の半数以上がへき地校である。へき地では，地域の商業施設等の生活環境による影響を受けやすく，地域に同世代の子どもが少ないために，帰宅後に遊ぶことが困難であるなど，小学生の生活にも地域の影響を受けている。

小学生の生活実態がどのようなものになっているのか，生活時間調査とアンケート調査から探った。その結果，手伝いの有無や時間，習い事の種類では性差があることが明らかになった。女子のほうが手伝いをしている割合が高く，その時間も長くなっていた。習い事では男子が運動に集中していたが，女子は運動以外にも音楽を習っているなど習い事の種類が多様であるなどの性差がみられた。

１，はじめに

北海道道東地域（釧路管内）に存在する小学校の70％がへき地校であり，釧路管内では釧路市を除くと約90％の小学校がへき地校認定を受けている。これらのへき地校は，駅やバス停から離れている，大型商業施設や娯楽施設から離れているなど日常生活上でも地域の影響を受けやすいと考えられる。

生活時間調査は，生活行動を明らかにし，それらの生活行動に対して費やしている時間を明らかにすることができる調査である。さらに日常では意識していない家庭内での役割や性別役割分業について，数値で明らかにすることができる。

小野（2013a）はこれまで，東京と北海道の小学校５年生の生活時間調査を行い，生活環境の差によって，学習時間が変化すること，家事時間と戸外での活動時間には性差が表れやすいことを明らかにしている。しかしこれらの調査はいずれも都市部の小学生であり，へき地校を対象にしたものではない。

へき地校における児童の生活実態では，小野ら（2013c）が釧路管内４市町の小学校５年生を対象とした生活時間調査を行っている。この調査では，へき地校の児童の特徴として，第１に収入労働に費やす時間があること，第２に通学時間が短いこと，第３に平日の女子が戸外活動を行う時間が短いこと，第４にへき地校の女子は休日家事時間が長いことを明らかにしている。これらの結果からは，へき地校の子どもたちの生活実態として，性差が表れやすいと考えられる。しかし，どのような行動を行っているからなのか，その理由までは探れていない。

一方，文部科学省平成25年に行った「全国体力・運動能力，運動習慣等調査」では，肥満児童の出現率は男子大都市8.9％に対してへき地15.3％，女子大都市6.8％に対して12.3％と，いずれもへき地地域において２倍近いことを明らかにしている。さらに男子は運動時間が長いものの，女子は男子に比べて運動時間が短く，運動部やスポーツクラブに入っている率も低いことから運動不足であることを明らかにしている。

これらの先行研究からは，へき地校において性差が見られる傾向があることが分かった。そこで2012年に実施していない釧路管内４町村を対象に追加調査を行い，隣接する地域における小学生の生活実態を把握するとともに，日常生活に対するアンケート調査も行い，生活時間調査では現れない生活実態も明らかにすることとした。

２，調査方法及び調査対象

調査対象は，北海道道東地区釧路管内西部の４町村（Ａ町，Ｂ町，Ｃ町，Ｄ村）にある公立小学校の５年生で，調査実施時期は2013年６月から９月である。調査は教育委員会を通じて調査依頼を行い，調査用紙を配布し，郵送で回収した。

回収した学校数は13校，回収した調査用紙のうち，記録の不備をのぞいた有効回答数は男子91名，女子81名，合計172名となった。回答者数及び回収できた学校数は表１に示した。

表１　有効回答者数

町村名	学校数	男　子	女　子	合　計
Ａ　町	4校	33名	31名	64名
Ｂ　町	2校	32名	22名	54名
Ｃ　町	4校	15名	19名	34名
Ｄ　村	3校	11名	9名	20名
合　計	13校	91名	81名	172名

生活時間調査は10分ごとに区切りのある記入用紙に記入してもらう日記形式で行った。平日・休日（学校のない土曜日・日曜日）における24時間の全ての行動を10分毎に記録してもらい，記録された行動を，後から調査者が分類を行うアフターコード形式で行った。

本研究では，小野ら（2012ｂ）の分類方法を参考にし，収入労働時間，家事的生活時間，生理的活動時間，学習時間，余暇活動時間の５つに分類をすることにした。さらに細かい生活行動については表２に示す行動分類にしたがって分類し，集計を行った。

アンケート調査の質問項目は，朝食の有無，手伝いの有無，手伝いの種類，習い事の有無，習い事の種類，習い事の回数，家族との触れ合う時間の５項目である。今回の分析では，手伝いの有無，習い事の有無と生活時間調査結果とを比較検討することとした。

表２　行動分類表

大　分　類	小　分　類
収　入　労　働	家業の手伝い
家事的生活時間	家事
	買い物
生理的生活時間	睡眠
	休憩
	食事
	身支度
学　習　時　間	学校での学習
	学校外の学習
	移動
余暇活動時間	趣味娯楽
	戸外の活動
	室内の活動
	交際，組織活動

３，アンケート調査による結果

1）手伝いの有無

お手伝の有無について男女別に集計し，図１に示した。

手伝いをしている割合は男子59.3％，女子78.0％となった。女子のほうが男子より手伝いを行っており，その差は約20％多くなっていた。

次に，手伝いの有無は地域の影響を受けているかを検証するために，手伝いをしている割合を町村別に比較し図２に示した。

図１　手伝いをしている割合

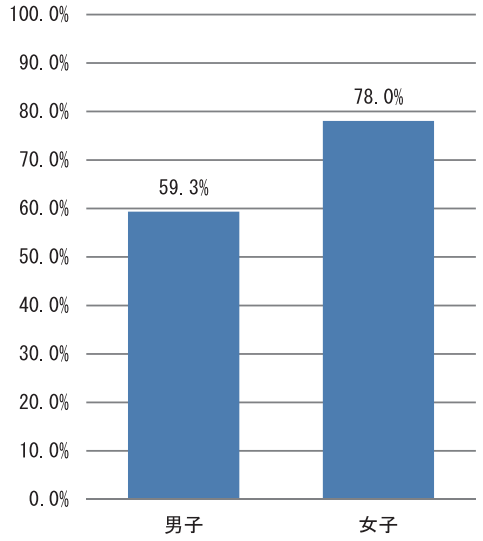
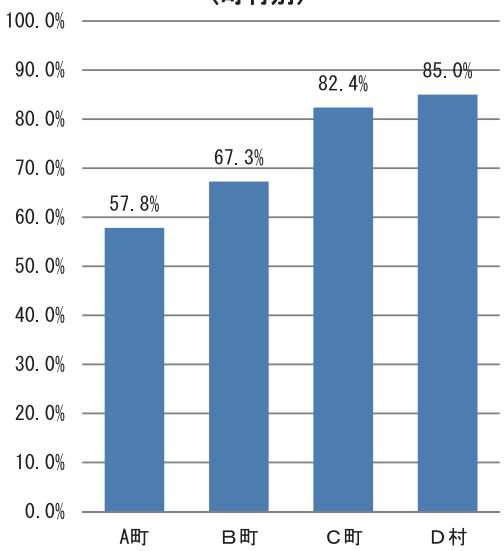


図２　手伝いをしている割合（町村別）



手伝いをしている割合が最も低かったのは，Ａ町で57.8％，次いでＢ町で67.3％，Ｃ町で82.4％，最も高かったのは，Ｄ村で85％であった。地域別で比較すると，もっとも手伝いをしているＤ村ともっとも手伝いを行っていないＡ町では，その差は27.2％となった。

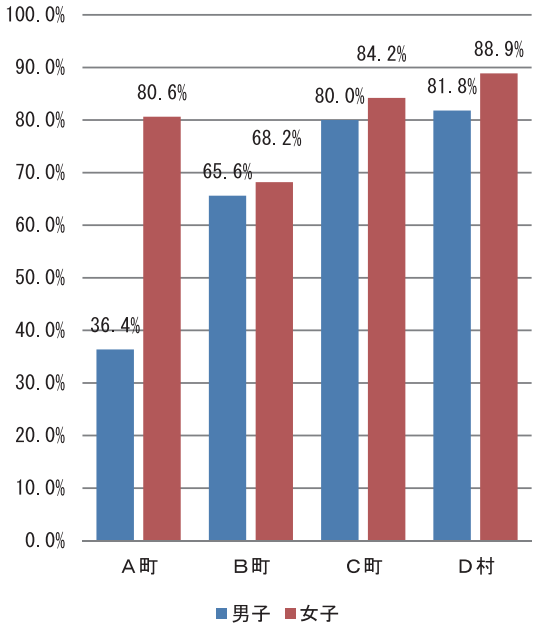
どの地域においても，半数以上の子どもが手伝いを行っていることが分かった。さらに，地域によって手伝いする割合が異なることも明らかになった。

次に，町村別男女別に手伝いを行っている割合を比較し，図３に示した。手伝いを行っている割合は，Ａ町の男子36.4％，女子80.6％，Ｂ町の男子65.6％，女子68.2％，Ｃ町の男子80％，女子84.2％，Ｄ村の男子81.8％，女子88.9％であった。男女差がもっとも大きかったところはＡ町で

44.2％の差があった。男女差がもっとも少なかったところは，Ｂ町で2.6％の差であった。

どの地域においても女子のほうが手伝いをしている割合が高い結果となった。また地域によって，性別による差があることも明らかになった。

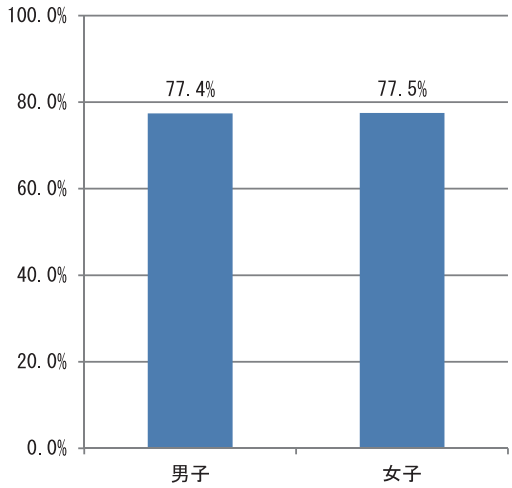
図３　手伝いをしている割合
（町村別・男女別）



2）習い事の有無

習い事を行っている割合を，男女別に集計し，図４に示した。習い事をしている男子は，77.4％，女子は77.5％となっており，男女による差はなかった。

図4　習い事をしている割合
（男女別）



次に，町村別における習い事を行っている率を比較し，図５に示した。

習い事をしていると答えた子どもの割合は，Ａ町とＢ町で77.8％，Ｃ町で75％，Ｄ村で80％であった。４つの地域で大きな違いはなく，子どもたちの70％以上が何らかの習い事をしていた。さらに習い事の有無を町村別に男女別に比較し，図６に示した。

図５　習い事をしている割合
（町村別）

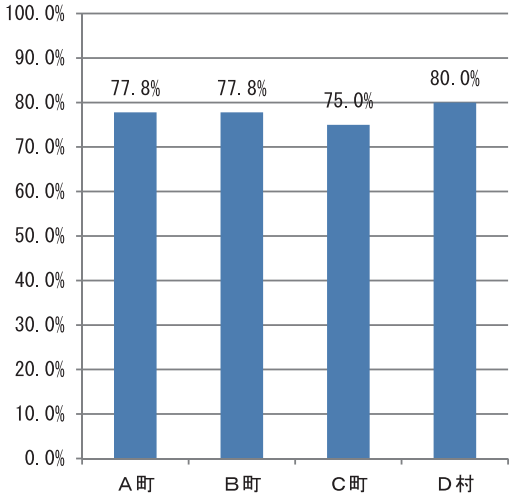
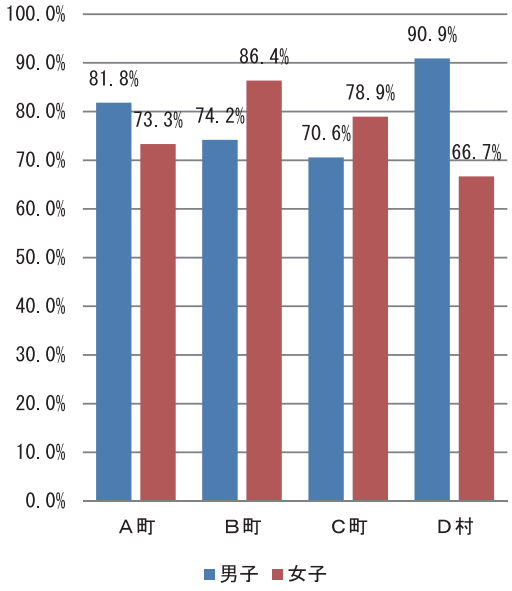


図６　習い事をしている割合
（町村別・男女別）



習い事をしていると答えた子どもの割合は，Ａ町の男子81.8％女子73.3％，Ｂ町の男子74.2％女子86.4％，Ｃ町の男子70.6％女子78.9％，Ｄ村の男子90.9％女子66.7％であった。この結果から，Ａ町とＤ村は男子のほうが習い事をしている割合が高いが，Ｂ町とＣ町は女子のほうが高いことが分かる。このことから，習い事の有無は地域や性別の影響を受けていないと言える。

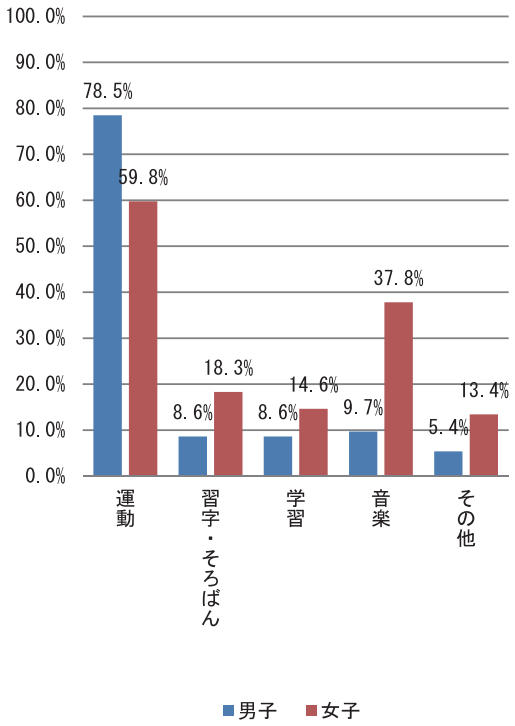
また，子どもから挙げられた習い事を，表３のような運動，習字・そろばん，学習，音楽の４種類に分類した。これらの分類に従って，それぞれの種類における習い事をし

ている割合を男女別に比較し図７に示した。

表３　習い事分類表

分類名	具　体　例
運　　動	野球・サッカー・テニス バドミントン・バレーボール・柔道 剣道・空手・水泳等
習字・そろばん	習字・そろばん
学　　習	学習塾・英語・家庭教師等
音　　楽	ピアノ・エレクトーン・吹奏楽 合唱等

図７　習いごと別習っている割合
（男女別）



男子が習っている割合が高いのは，運動78.5％であり，音楽9.7％，習字・そろばんと学習8.6％が同じ割合であった。これに対して，女子が習っている割合が高いものは運動59.8％，音楽37.8％と続き，習字・そろばん18.3％，学習14.6％となっていた。これらのことから，習い事の種類では男子は運動に集中しており，それ以外の習い事を習っている割合は少なくなっているが，女子は運動を習っている割合が６割を占めているものの，音楽も約4割習っていることが分った。よって，女子のほうが習い事の種類が多様であると言える。

習い事の有無は地域や性別による差はなかったが，習い事の種類は性別による差があると言える。

４，生活時間調査の結果

1）男女別平均からみる子どもの特徴

生活時間調査の結果を男女別に集計し表４に示した。

表４　男女別平均

全体		男　子	女　子
収入労働時間		3	3
家事的時間	家事	8	20
	買い物	16	19
家事的生活時間合計		24	38
生理的時間	睡眠・休憩	554	567
	食事	103	108
	身支度	54	63
生理的生活時間合計		710	737
学習時間	学校	202	199
	学校外での学習	38	45
	学習のための移動	26	24
学習時間合計		267	269
余暇活動	習い事	6	21
	趣味・娯楽の時間	179	148
	戸外の活動	121	77
	室内の活動	115	126
	交際・組織的活動	6	7
余暇活動の時間合計		428	384
そ　の　他		1	1
不　　明		7	8
合　　計		1,440	1,440

（各項目の数値は、平均値を四捨五入しているため、合計時間が1,440分とずれる場合があります。）

大分類を見てみると，収入労働時間は男女ともに３分となっており同じ時間を費やしていた。男子が女子より多くの時間をかけていたものは，趣味娯楽の時間でその差は44分であった。家事的生活時間では14分，生理的生活時間では27分，学習時間では２分，女子のほうが男子より時間をかけていた。

小分類で10分以上の差が出た項目は，戸外の活動44分，趣味娯楽の時間31分，習い事15分，睡眠休憩13分，家事12分，室内の活動11分の７項目である。男子のほうが女子より長い時間を使っていたものは，戸外の活動と趣味娯楽の時間であり，女子のほうが長かったのは，習い事と睡眠休憩，家事，室内の活動であった。

これらの結果から，男子は屋外で過ごす時間を多く取っており，趣味娯楽に時間をかけているが，女子は室内で行う家事・習い事などに時間をかけているなど，男子のほうが活動的に生活している様子が見られた。

2）家事的生活時間における４町村，男女別平均からみる子どもの特徴

手伝いの有無に関するアンケート調査では，どの地域でも女子が男子よりも実施している割合が高くになっていた。そこで生活時間調査において男女でどの程度差が出ているのか，４町村ごとに男女別に家事時間的生活時間を比較し，表５に示した。

表５　男女別家事的時間平均

町　村	性　別	家　事　時　間		家事的時間合計
		家　事	買い物	
Ａ　町	男　子	7	2	9
	女　子	15	27	42
Ｂ　町	男　子	8	12	20
	女　子	14	17	31
Ｃ　町	男　子	7	24	31
	女　子	24	9	33
Ｄ　村	男　子	9	30	39
	女　子	33	28	61

家事的生活時間合計においては４町村とも，女子のほうが男子よりも長く行っていた。もっとも多く家事時間を費やしていたのは，Ｄ村の女子であり61分であった。もっとも少なかった女子はＢ町で31分となっていた。男子で最も多く家事時間を費やしていたのは，Ｄ村で39分となっており，もっとも少なかったのはＡ町で９分であった。

男女の間でもっとも差があったところは，Ａ町の33分であり，次いでＤ村の22分，Ｃ町の11分であり，もっとも差が少なかったのはＣ町の２分であった。

小分類である家事と買い物を比較すると，男子よりも女子が家事・買い物両方において長く行っていたところはＡ町とＢ町であった。それに対してＣ町とＤ村は，家事は女子のほうが長く行っていたが，買い物は男子のほうが長く行っていた。

Ａ町は男子より女子が家事は８分，買い物は25分長く，Ｂ町は男子より女子が家事は６分，買い物は5分長くなっていた。Ｃ町は，家事は女子が17分長くなっていたが，買い物は男子が15分長くなっており，Ｄ村は，家事は女子のほうが24分長くなっていたが，買い物は男子のほうが2分長く行っていた。

これらのことから，女子は家事を行っている時間が長く，買い物にも多くの時間をかけているといえる。これに対して，男子も家事を行っているものの，その時間は10分以下である。しかし買い物時間に関しては女子よりも男子のほうが長い地域があった。特にＤ村では男女ともに約30分をかけていたが，地域に大型商業施設はなく，隣接する市街地まで買い物に出かけているため移動時間が長くなっているからと推測される。よって買い物は性別による差ではなく，地域の環境の影響を受けていると言える。

５，考察

アンケート結果と生活時間調査からは次のことがあきらかになった。

1）男子の生活実態

男子の生活実態としては２点挙げられる。１点目として，戸外の活動を行う時間が長いことである。平日休日の平均時間では戸外の活動に約２時間を費やしていた。これは習い事の種類でも男子は運動を習っている率が78.5％と高くなっていることからも裏付けられる。特に運動でも野球・サッカーを習っていると答えている男子が多いことから，平日も休日も練習を行っており，休日になると大会や練習試合などが行われているため練習時間も長くなっているが，移動時間も長くなっているからであると言える。

２点目に趣味娯楽の時間が長いことである。趣味娯楽の時間に178分を費やしている。一日に３時間弱を趣味・娯楽に費やしており，余暇活動全体では428分と一日の四分の一を使っていた。

2）女子の生活実態

女子の生活実態として３点あげることができる。１点目は家事時間が長いことである。家事に20分，買い物に19分費やしていること，さらにアンケート結果からもお手伝いをしていると回答した割合が高いことから，毎日何かしらの家事を手伝っており，手伝うことが習慣となっていることが推測される。

２点目に習い事の時間が男子に比べて長いことが言える。男子６分に対して，女子は21分と15分長い。この理由として習い事との関連が挙げられる。女子は音楽の習い事をしている割合が37.8％しめている。音楽の習い事では，レッスンを受けに行く以外にも，自宅での練習が欠かせない。そのためにレッスン自体は１週間に１回程度で短いが，平均すると習い事にかける時間が長くなっている。

３点目に戸外の活動時間が短いことが挙げられる。戸外の活動は77分となっており男子の121分に比べると44分短くなっていた。習い事のアンケートでは，59.8％の女子が運動を習っていると答えている。男子が野球やサッカーを習っていると答えているが，女子はテニス・バトミントン・バレーボールを習っていると答えており，習っている運動の種類が異なっていた。野球やサッカーのように，練習回数が多く，週末になると練習試合を行っている競技に比べ，女子の習っている競技は練習回数も試合に行く回数も少ないからであると考えられる。

3）全体の特徴

道東地区の小学生は，お手伝いと習い事の種類において性差が見られた。また習い事の種類は，同じ学校の子ども

が全員同じ習い事をしている地域もあった。このことから地域にある習い事を選択するしかない場合もあることが示唆された。また，習い事の種類によっては近隣地域まで習いに行っている事例も見られた。したがって，習い事として選択できる種類は限られ，子どもが習いたいと考えても習う場所や機会が少なくなるという点で地域の影響を受けていた。

また，D村の場合には買い物時間が長く，男女の差がなかったため，商業施設の有無による影響を受けていると言える。

しかし，習い事の有無については，性差はなく，さらに地域の影響もあまりないことが分かった。

引用及び参考文献

大竹美登利：大都市雇用労働者夫妻の生活時間に見る男女平等，近代文芸社　1997

大竹美登利，小野恭子，中山節子：Analyses the elementary school children's time use as a resource of human capital in the future，東京学芸大学紀要，第59集，411-416，2008

小野恭子：家族の生活時間データーから見る子どもの生活について，東京学芸大学附属学校研究紀要，第35集，65-74，2008

小野恭子，鎌田浩子，大竹美登利：小学校の生活時間調査から見る都市間比較，日本科学教育学会研究会研究報告，Vol. 27　No2，83-86，2012

小野恭子，鎌田浩子，大竹美登利：地域における小学生の生活比較―東京と北海道の生活時間調査より―，北海道教育大学紀要（教育科学編），第64巻，第1号，pp215-222,2013 a

小野恭子，大竹美登利，鎌田浩子：地域が子どもの生活に及ぼす影響-北海道道東地区における生活時間調査から-，日本家政学会第65回大会研究発表要旨集，pp99，2013 b

小野恭子，鎌田浩子：地域の環境が小学生に与える影響－北海道道東地区の生活時間調査より－：2013へき地教育研究，第68号，2013 c

文部科学省：平成25年度全国体力・運動能力，運動習慣等調査結果・特徴，http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/1342661.htm，2014，6月14日閲覧

（小野恭子　弘前大学講師）